

(福井)

福井・福井城跡 (2)

- 1 所在地 一 福井市宝永一丁目
二 福井市宝永三丁目
- 2 調査期間 一 一九九八年(平10)六月～一九九九年三月
二 一九九七年五月～一九九八年三月
- 3 発掘機関 福井市教育委員会
- 4 調査担当者 一 田邊朋宏・海道順子・青木元邦・免美智子
二 長谷川健一・天谷賢一・白嶋祐司・田中伸卓
- 5 遺跡の種類 近世城郭跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

福井城跡は、現福井市街中央に位置する近世城郭跡である。慶長六年(一六〇二)初代藩主結城秀康による築城以来、幕末まで利用された。近代以降は徐々に取り壊され、今に残るのは

本丸石垣と堀のみである。本丸を中心に、四重の堀を廻らせる輪郭式平城である。

発掘調査地は二カ所ともに、北の外曲輪にあたる。調査地一は、JR福井駅周辺再開発事業に伴う調査で、一九九六年から一九九九年三月まで約三〇〇〇㎡を発掘した。調査地は福井城跡の北東部の外堀を跨ぐ範囲である。木簡は、上級武士の下屋敷地内に掘られたゴミ穴・溝から六點出土している。(1)はゴミ穴(土坑一三)から出土しており、共伴する陶磁器から一九世紀と考えられる。また、(2)～(6)は、いずれも溝から出土したものであり、(2)は一八世紀、(3)～(6)は一七世紀中頃と推定される。

調査地二は、公共施設建設に伴う調査で、一九九七年以来約五〇〇㎡を対象に、現在も継続中である。場所は福井城跡の北端中央、「舍人門」周辺にあたる。今回報告する木簡六點は総て一九九七年調査のもので、外堀土居際(城内側)で検出した、三カ所のゴミ穴から出土している。いずれも一八世紀のものである。

8 木簡の積文・内容

一 調査地一

ゴミ穴(土坑一三)

(1) 「糸巻」

76×43×7 0.11

溝三

(2) 「重藤岡右衛門」 (107)×26×3 019

溝九

(3) 「」 (146)×(39)×1 065

(4) 「道西」
[審カ] (146)×(39)×1 065

・漆十
[竹カ] (141)×22×1 081

(5) 旦波置
[鐘カ] (140)×18×1 081

溝五

(6) 「若彦右衛門」

・「水谷得藏」 (110)×28×5 039

(2)は下部が欠損しており、墨書は人名と思われる。(3)は下部および左側が欠損しており、墨書も左側が欠損している。上端は斜めに切り落とされ、右側に切り込みが三段入り、卒塔婆のような形状をしていたと思われる。(6)は上部左側および下部は欠損している。

このほかにも墨書の有無が確認できない、付札型木製品が溝五から出土している。

二 調査地

三区「ミ」穴

(7) 「」

・ (95)×50×5 019


一〇区「ミ」穴

(8) 「」
[保十五カ]

(記号) (32)×71×7 081

(9) 「雨田平之丞」 175×25×1 019

(10) 「十二月」

・「十二月」 152×40×9 011

(11)  278×(57)×3 061

一〇区「ミ」穴

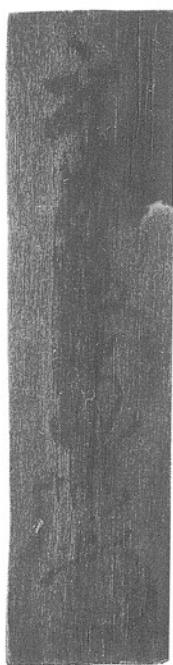
(12) ・「小藤原」

・「段下」 98×19×2 051

(7)は上部が欠損している。墨書は認められるものの、文字数、内容共に判別できていない。(8)の上部は欠損しており、もとの形状は不明であるが、左右ともに挟られており、下部の左右端は切り落とされている。四隅を切り落とした板状のものの可能性もある。墨書は三行認められ、左の行の上は記号だが、その下は判読できていない。(9)の下端部はごく一部が残存するのみである。(10)は上方に孔が穿たれている。(11)は文字の右側が欠損しているが、火偏の文字であ



(6) 表



(2)



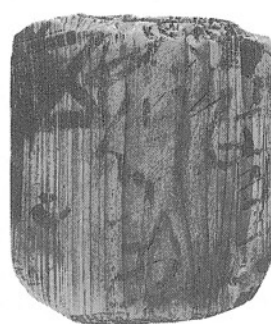
(1)



(12) 表



(9)



(8)

(1) (2) (12) 80%
 (6) 65%
 (8) (9) 50%

る。上方左側には木釘状のもの（破損している）が二本打ち込まれている。ここでの表裏、上下の表現は文字を基準にしているが、この板は曲物の一部である可能性が高く、本来は横長のものと考えている。(12)は下部の左右を削り、先を尖らせている。

以上の六点が一九九七年度調査で出土しているが、発掘調査は継続中である。一九九八年度以降の調査では、武家屋敷の住人の姓が墨書された瀬戸皿が出土している。またこの他に明治二〇年前後の遺物を投棄した土坑が数基確認され、文字の書かれた木製品も十数点出土し、年月日、地名、人名などが判読できている。

木簡の釈読については、福井市郷土歴史博物館の足立尚計氏に協力を賜った。また調査地一に関しては、調査を担当した青木元邦氏の協力を得て記述している。

（長谷川健二）

石川・^{かみ}神野遺跡

- 1 所在地 石川県金沢市神野町西地内
- 2 調査期間 一九九七年（平9）五月～十二月
- 3 発掘機関 金沢市教育委員会
- 4 調査担当者 久保有希子・新出敬子
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期、古墳時代前期、古代（八～九世紀）
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（金沢）

本遺跡は金沢市の西方、犀川西岸の沖積平野に位置する。基本的に古代の遺跡であるが、部分的に弥生・古墳時代の遺構・遺物も確認できる。木簡が出土した遺構は、九世紀中頃～後半にかけての遺物が出土する幅二～三m深さ平均〇・八mの南北方向に流れる溝SD〇三である。溝の方向が南北の方位に乗ることから、何らかの区画の意味を持つ溝の可能性も想定でき